情報行動の変化に適応した情報活用能力の育成

菅谷 克行[*1]
Email: katsuyuki.sugaya.principia@vc.ibaraki.ac.jp

*1：茨城大学 人文社会科学部 現代社会学科

◎Key Words　情報活用能力，情報リテラシー教育，情報行動，デジタル読解力，情報引き寄せ

1. はじめに

インターネット上に流通する情報を適切に活用する能力は，現代社会におけるリテラシーの一部として認知され，学習・教育の場のほか，日常の社会生活においてもその重要性が高まっている。特にモバイルインターネット環境が整ったことにより，時間や場所を問わず，誰もが日常的にインターネットにアクセスできるようになり，検索エンジンを通じて，気軽・迅速に知りたい情報を入手できるようになった。さらに最近では，検索エンジンに加えて SNS 等を利用した情報収集・蓄積等の情報行動も見られるようになった。

しかし，教育・研究指導の場において，必要な情報・資料・文献にたどり着けない学生に遭遇することが少なくない。学生は情報リテラシー教育を受け，情報を検索・収集するツールや環境も整っているはずなのに，なぜ必要な情報を効率的に探し出して情報活用につなげることが困難なのであろうか。

本研究では，学生の情報行動・環境の変化やその特徴を分析した結果に基づき，それに適応した情報活用能力の育成・教育内容について議論・検討することを目的とする。特に本稿では，情報検索・収集能力とデジタル読解力の育成について検討・提案する。

2. 情報リテラシー教育と情報検索・収集行動

インターネットが普及し始めた頃には，情報活用能力の一要素として，情報検索・収集能力に関する様々な検討がなされていた。たとえば妹尾[(1)] は，情報社会におけるリテラシーの変容について「深化・拡張・多様化」の観点から考察し，情報の「検索」と「探索」を重要な思考法として位置づけ，情報活動の基本として教育する必要性について述べている。戸田[(2)] は，情報検索行動をメディア・リテラシーの観点で検証し，情報技術を活用する知識や技能は習得されているにもかかわらず態度の問題により情報源を十分活用できていないという指摘をしている。また，菅谷と狩野[(3)] は，探索的手法として決定木による分類を用いて情報検索能力に影響を与える要因を分析し，その知見から情報教育を見直すことを提案している。

その後，モバイルインターネット環境が整ったことにより，誰もが日常的に検索エンジンを使って，知りたい情報を気軽に調べられるようになった。Google で情報検索することを意味する「ググる」という言葉も社会に浸透して久しい。さらに近年では，若者の間で情報を手に入れるために「まずググる」ということは主流ではなくなってきており，彼らが代わりに駆使するのは，若者の間で多く使われている SNS の「ハッシュタグ機能」であるという記事[(4)] もある。

博報堂 DY メディアパートナーズメディア環境研究所他の調査[(5)] によると，若者の情報検索行動は，知りたい情報をその都度検索する「都度，検索」から，あらかじめ興味のある情報を手元に集めておく「情報引き寄せ」へと変化しているという。情報引き寄せとは，「情報をとりあえずためる行動」と「（自分が欲しい有益な）情報が自然にたまるようにする行動」とに分けられる。とりあえずためる行動とは，日常生活の中で少しでも気になった情報を，主にスマートフォン等で写真に撮ったりメモに残したりすることである。SNS 上で気になる情報や画像を見つけた時に，スクリーンショットで保存することもこれに含まれる。他方，自分が欲しい有益な情報が自然にたまるようにする行動とは，SNS で「いいね」や「フォロー」をすることや，「検索履歴を保存すること」などが挙げられる。つまり，少しでも興味のある情報には積極的に「いいね」や「フォロー」で反応し，自分が欲しい情報（興味関心に沿った有益な情報）が常に更新されながら自然にデバイス内に蓄積される状態にしているという。

これら若者の情報引き寄せ行動に関して，高松と菅谷[(6)] は，大学生を対象とした調査・実験を通じて「情報収集は検索エンジン利用が主たる手段であるが，情報引き寄せ行動も半数以上が実施していること」「情報引き寄せ行動が意思決定スピードに及ぼす影響は認められなかったが，収集する情報の絞り込みや情報活用における考え方や態度に影響を及ぼしていること」「SNS は単なるコミュニケーション・ツールではなく情報を引き寄せる手段でもあること」を明らかにしている。そして，情報環境・サービスを効果的に活用した情報行動を，情報リテラシー教育の重点テーマの一つとして検討し直す必要があることを指摘している。

このように，情報テクノロジーやサービスも含め，若者（大学生）の情報行動・環境は変化を続けており，それらの変化に適応した情報活用能力の育成が必要である。そこで次章では，上記知見をもとに，情報検索・収集能力の育成について，今後の情報リテラシー教育で取り組むべき事柄について検討・提案する。

3. 情報検索・収集能力の育成教育

先述の知見に基づいて，ここで検討・提案するのは，(1) 基盤となる情報検索・収集スキルとデジタル読解力の育成，(2) 新たな情報行動・環境を積極的に活用した情報収集スキルの育成，の 2 つである。

3.1 基盤となる情報検索・収集スキルとデジタル読解力の育成

これまでも情報リテラシー教育の中で扱われている情報検索スキルや，情報の真偽・取捨選択を扱うメディア・リテラシーの育成に加え，デジタル読解力[7]の向上を意識した教育指導が，今後の情報活用能力の育成の基盤となるであろう。

情報検索スキルの教育には，情報機器を操作する ITスキルも含まれ，キーワード検索，AND・OR 検索，フレーズ検索，画像検索など，検索エンジンの使い方やコツが中心となる。「ググる」という言葉が流行したように，多くの人が日常的に気になったことや知りたいことを検索エンジンを利用して調べることが当たり前になったが，実際に効率的に必要な情報にたどり着いている人はどれくらいいるのだろうか。先述したように，授業課題や卒業研究の指導でアカデミックな情報や文献・資料を調査させることがあるが，代表的キーワードでヒットする情報・文献のみしか入手できていなかったり，誤った情報や根拠に乏しい情報を持ってきたりして，本来必要としている情報・文献にたどり着けてない学生が決して少なくない。これは，インターネットで情報検索することが一般的になってきてはいるが，情報検索・収集スキルは十分育成されていない可能性を示唆するものである。

メディア・リテラシーの基本である，複数の情報源や発信元の信頼性を確認しながらその情報の真偽を見極める態度や，検索でヒットした資料・文献を読む際のクリティカル・リーディングやクリティカル・シンキングなどの能力が，十分身についていないのではないかとも考えられる。近年，これらの能力は「デジタル読解力」[7]と呼ばれており，インターネット上に流通しているデジタル情報・文献・資料の基本的かつ総合的な読解作法・スキルとして，その教育指導の必要性が強調されている。単にテキスト情報を読むだけではなく，図表の読解や複数情報の比較など，多くのスキル要素を含んでおり，今後の情報活用能力育成に必須の内容であることは間違いないであろう。

また，そもそも検索エンジンの特徴として，個人の検索・閲覧履歴等によって，検索結果の表示内容がパーソナライズされていることも知っておかなくてはならない。これは「フィルターバブル」[8]と言われているものであり，検索結果としてユーザの嗜好に合った情報が優先的に表示されることにより，知らずしらずのうちに自分自身で情報の取捨選択ができなくなっている可能性が指摘されている。この「フィルターバブル」は，検索エンジンのみに限らず，ショッピングサイトの「おすすめ情報」や SNS 上の TL 表示情報など，インターネット上のあらゆる情報提供サービスに組み込まれている。そのため，バランスのとれた情報活用能力を育成するためには，この仕組みを理解させ，自身の情報行動を見直すことを教育指導する必要がある。

3.2 新たな情報行動・環境を積極的に活用した情報収集スキルの育成

情報技術や社会は常に変化を続けている。そのため，新たな情報技術・環境・サービスによって新たな情報行動・収集方略が現れる。それらを自らの情報活用能力向上に積極的に活かしていく態度・能力が必要であろう。特に，「情報引き寄せ」[5]と呼ばれる方略は，日頃から興味関心の高い情報に関してアンテナを張っておく行為に近く，それによって自身の情報感度を高め，自然に欲しい情報が集まってくる等の効果が期待できる。この方略を多くの若者は（学校等で教わることなく）実行しており，日常・社会生活における情報収集・蓄積のほとんどが当該方略を用いている場合も少なくない。そのため，この方略を積極的にアカデミックな情報や将来のキャリアに関する情報の収集・蓄積にも活用することを教育指導できれば，多くのメリットがあることと考えられる。

ただし，これら情報引き寄せの方略においても，フィルターバブルの影響については十分留意する必要がある。やはり，複数の方略・情報源を活用する能力や，総合的なデジタル読解力を鍛える必要がある。

4. おわりに

複数の情報収集手段・方略やデジタル読解力を身につけ，適切かつ有用な情報を効率的に探し出して，学術活動や将来の意思決定に活用することは，大学生必須のスキルといえる。本稿で検討・提案した情報検索・収集能力やデジタル読解力を含めた情報活用能力を育成・向上することが，今後の情報リテラシー教育にとって，重要な目標になることと考える。今後も，情報環境の変化や情報活用能力の分析に基づく情報教育の検討を，継続的に進める必要があると考えている。

参考文献

(1) 妹尾堅一郎："リテラシーの変容と「検索・探索」ー情報活動教育のフレームワークと実践ー", コンピュータ＆エデュケーション, Vol.9, pp.42-47 (2000).

(2) 戸田里和："ネットユーザーの情報行動に関する研究ー情報検索とメディア・リテラシーに関する検討ー", コミュニケーション研究, Vol.38, pp.103-121, (2008).

(3) 菅谷克行，狩野紀子："決定木を用いた情報検索能力の分析", コンピュータ＆エデュケーション, Vol.18, pp.145-151 (2005).

(4) 太田彩子："若者に「ググる前にインスタ」が定着した意味", 東洋経済 ONLINE, https://toyokeizai.net/articles/-/133968 , (2020 年 6 月 13 日閲覧).

(5) 博報堂 DY メディアパートナーズメディア環境研究所, 博報堂買物研究所, D.A.コンソーシアムホールディングス広告技術研究室:"スマホ・ネイティブの新行動「情報引き寄せ」", https://www.dac-holdings.co.jp/uploads/20180710_reserch.pdf , (2020 年 6 月 13 日閲覧).

(6) 高松仁美, 菅谷克行："情報収集行動の違いが意思決定に及ぼす影響ー学生と対象とした調査実験の結果よりー", CIEC 春季カンファレンス論文集, Vol.11, pp.93-98 (2020).

(7) 文部科学省・国立教育政策研究所："PISA2009 年デジタル読解力調査～国際結果の概要～", https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/pisa2009_Result_Outline.pdf, (2020 年 6 月 13 日閲覧).

(8) Eli Pariser："The Filter Bubble (邦訳『閉じこもるインターネット 』)", Penguin Books, (2011).